The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	恵慶と伊勢の歌 : その接点を求めて
Author(s)	加藤, 雄一
Citation	詞林. 2000, 27, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67444
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

恵慶と伊勢の歌

―その接点を求めて―

加藤　雄一

一、はじめに

三代集時代において、絶大な支持を得た女流歌人と言えば、疑うことなく伊勢を挙げる事が出来るであろう。その歌風は、古今的歌風の代表とされながらも、[1]伊勢独自の言葉の選択が随所に見られ、歌語としては些か均整のとれないものが大胆にも使われている。そしてそれは、その場限りで読み捨てられてしまうものもあれば、時を経てのちの歌人らに好んで受け入れられたものもある。このように、伊勢独自の言葉の行方を追跡していくと、その線上に「恵慶」の名を目にする事がしばしばある。これはどういう事なのだろうかと考えてみると、恵慶が、伊勢の歌、それも伊勢が使用した言葉で、且つあまり類例を見ない言葉を摂取していたためではないかと思われる。このような見通しを立てて、伊勢歌と恵慶歌の関係を探り始めてみた。すると、両者の関係は単なる歌の摂取という次元だけにとどまることなく、その当時における『伊勢集』の形態を推測させる事態迄を誘発する。そこで本論ではまず、伊勢歌の摂取がどの程度行われているのかを確認する事で、恵慶が伊勢歌を耽読していた事を明確にし、そこから恵慶とその当時における『伊勢集』との接点を明らかにするのが目的である。

二、恵慶歌の特徴的表現

『恵慶法師集』の研究は、熊本守雄氏の『恵慶集校本と研究』[2]、その一点に代表されると言ってよく、ましてや恵慶歌の表現研究に至っては未開拓の領域である。近藤みゆき氏[3]には河原院圏歌人らの漢詩文摂取という視点から詳細に論じられたものもあるが、恵慶歌そのものを単独で論究したものは管見には入らず、加えて注釈書の類[4]も未刊である。

そこでまず、恵慶歌にみられる特徴的な表現から見ていきたいと思う。恵慶が和歌の中に好んで使った表現に「むら―」というものがある。「むらもみぢ」「むらだつ」「むらかぜ」「む

ら松」が、それであり、これらは恵慶歌が初出例となっている。

もみぢを、はじめて見る

①からにしきおりつむみねのむらもみぢ見そむるけふはあからめもせず　（一〇一）

十二月、ある所の歌合せさせ給ひしに、松、にはのむめ、冬月、池のこほり

松の雪

②むらたづのやどれるえだと見るまでにまつのみどりもうづむしらゆき　（一一三）

かぜのおとのたかきをききて

③ひらのやまもみぢよのまはいかならむみねのむらかぜうちしきりふく　（一一五）

（冬）

④すみよしのきしのむら松たわむまでふりしこりぬるふるさとの雪　（二四一）

③④に関しては古本系統との異同があり、多少の問題はあるかと思うが、ここでは、「むらかぜ」「むら松」で解釈しておく。[5]

この「むら―」という表現は恵慶歌にもうひとつあり、それは、

（春）

⑤ふかみどりはやまのいろをおすまでにふぢのむらごはさきみちにけり　（二一五）

という歌中の「むらご」である。「むらご」とは、

生地や糸、また紙などを染めるのに、同一色でありながらところどころに濃い色の部分を持つように染めることで、一種の文様としたもの。

と『角川古語大辞典』にはあり、それを踏まえて「むらもみぢ」の項では、

濃淡まだらに色づいた紅葉。

と説明し、①の恵慶歌を引用する。

では他の語例はどうなのか。例えば②の歌は、松の緑が真っ白に雪をかぶっており、それが松に群れる鶴の白さと錯覚してしまうと言うのだから、「群鳥」と同じ用法として捉えていいだろう。③の歌の比良山は、「北からこの山を越して琵琶湖に吹きつける風の激しさは有名」[6]であることから、風が一団となって強く吹きつける様子を「むらかぜ」と表現したのだろう。④の「むら松」も、②③の「むら」と意味は同じく、群らがって生えている松を指している。

一見するとこれらの「むら―」と「むらご」の「むら」は意味的に符合しない感があるが、『角川古語大辞典』が立項する「斑（むら）」においては、

均等・一様ではなく、ふぞろいであること。『名語記・四』に「染物にむらごなどいひて文のむら〳〵ある如何…所々に村邑のあるににたる風情なれば也、村濃也」とい

うように、もと群がってある状態をいったもの

と説明されるように、「むらたづ」「むらかぜ」「むら松」の「むら」と同源と捉えてよさそうだ。そこで⑤の歌を考えてみれば、濃き薄き色の藤の花は、「ふかみどり」を一掃してしまったかのように群がって咲いており、まだらに色づく花の色は、より一層濃き花の一群れを際立たせていると言えよう。そして恵慶は、その表現を次の歌によって修得したのではないかと思われる。それが伊勢の、

ふぢの花のさきたるところに、をとこきてかいまみてをんなのがりやる

ふぢのはなけふみつるより紫もむらごといろぞふかくなりぬる　（三八）

（□四に紫　□むら四こに）

という歌である。実は「むらご」という言葉を最初に取り入れたのは伊勢であった。この歌は寛平八年（八九六）六月から翌年の七月迄の間に、中宮温子の命により、一八首からなる恋の贈答歌を物語風に連作した中の一首である。男が女に詠みかける設定で、「藤の花を今日見てしまった時から、花の紫の色もまるで濃い部分と薄い部分があるように染め上げたむらごのようで、花の紫の濃さは一段と深みを増している。それと同じように、あなたへの思いも、一段と深くなっているのです」とある。そこから恵慶はこの「むらご」という言葉を自分なりに分析をし、修得したのではないか。「むらご」の表現は伊勢歌以降、恵慶歌以外にも、例えば『うつほ物語』に、

さいしやうさねただ

花をのみむらごにそむる春雨はときはの松はつらくみゆらん　（かすがまうで・一六三）

が、また『好忠集』にも、

（九月上）

はやまぎはゆふべにみればむらごなりたがおりそむるにしきなるらむ　（二四九）

がある。いずれも同時代作品ではあるが、藤の花に対して「むらご」を使った恵慶歌が、やはり伊勢歌を継承したものと言ってよいだろう。そして恵慶は伊勢歌の焼き直しにとどまることなく、自分なりに造語を開発し、上述した如く新たな歌語を作り出していったのだ。このように、恵慶は伊勢歌を熟読し分析できる環境にあると思われる。

三、伊勢と恵慶のみに見られる表現

伊勢歌で初めて使用が認められ、その後、恵慶歌にそれが確認出来たものを考察してみたが、「むらご」は恵慶の時代だけには限らず、それ以降、『相模集』や『久安百首』などにも登場するようになる。だが、そうでないものもある。つまり伊勢が初めて用いた表現を、恵慶が摂取し詠作を試みる。しかし、その表現は後代には受け継がれることなく、両者の

みで終息してしまうものがあるのだ。その歌を取り上げて考察してみる事にする。

【伊勢集・四一～四二】

六月はらへするところにをとこきあひて

年中に我(Ⅲわれか)がなげきどのなりぬれば(Ⅱとは Ⅲは)みそぐともよ(Ⅱと Ⅱよに身をくとも Ⅲ世にみそくとも)にうせじとぞ思ふ

（ママ）

返し

なげきどを(Ⅲをは)なべて(Ⅱ Ⅲて)はらふ(Ⅱたむく)るおほぬさははやかはのせにながれいで(Ⅱて)ぬめり(Ⅲにけり)

【恵慶法師集・二二三】

夏山にたつやをしかのつの(ま)ならでわがなげきどにおちざらめやは

伊勢と恵慶の歌に使用例が認められる「なげきど」という言葉は、ここに挙げた三例しか見当たらない特殊なものといってよい。

伊勢歌は、「むらご」の歌同様、所謂「四季恋物語屏風」の連作の中の贈答歌である。問題となる「なげきど」の箇所は、歌仙家集本系統（伊勢Ⅲ）では、「われかなけきは」「なけきをは」とそれぞれ異同が生じていて、そこには新奇な言葉としての「なげきど」は存在しない。歌仙家集本系統は所謂定家本の系統であり、従来言われている古態を保つとされる西本願寺本系統よりも、より祖本に近い形ではないかとしばしば言及されている。しかし、欠脱・誤写等はありながらも『伊勢集』最古写本の西本願寺本よりも、後の定家本系統の本文の方がより不安定な要素を抱えている事は否めない。よってここでは関根慶子・山下道代両氏による『伊勢集全釈』(7)に「書写の段階でも不安定なことばであった」とあるように、伝えられていく間に、耳慣れないものよりは意味の通り易い言葉の方がよいとされ、変化をしたものとみておきたい。そこで再び二首をみてみると、「我が」を「われか」とし、「を」を「をは」としている点がいかにも容易な方向に傾倒した本文であると感じられてならない。つまり「なげきど」の「ど」があることで書写者は腑に落ちない気がしたのだろう、なんとかこの「ど」一文字を削除し、その代わりに一字を補う必要性から、「我が」を「われか」とし、「を」を「をは」として、意味的には大きな差異が生じないよう、字数合わせで言葉を置換したと考えられる。(8) しかし、やはりこの歌は「なげきど」とあってこそ、伊勢が言葉に対して、果敢にも挑戦していこうとする若きエネルギー（特にこの屏風歌を詠進した時、伊勢は二十歳そこそこであったと言われる）をそこに感じ取る事が出来るのだ。

恵慶の「なげきど」の歌は「むらご」の歌と同じ歌群にあり、その冒頭には「ももちのうたのだい、これは世中にそねのよしただといふ人のよめるうたの返し」と付されていて、好忠百首への応和のなかの一首だとわかる。この歌は『万葉

集』の、

（柿本朝臣人麿歌三首）

夏野去　小壮鹿之角乃　束間毛　妹之心乎　忘而念哉

（巻四・五〇五）

を念頭において詠まれたものかと思う。そこでそれを踏まえて恵慶歌の解釈を試みなければならないのだが、「なげきど」という言葉自体が「用例のみえないことば」[9]であるが故に、辞書等では当然確認はとれず難解である。恐らくは「嘆き」＋「と（ど）」という語構成であると考えられ、そこから現在公刊される『伊勢集』の注釈書[10]は「と」に「所（処）」[11]を当てて「嘆き所」と解釈をしているようだ。穏健妥当な注解ではあるが、恵慶歌に目を転じてみれば、「なげきどにおつ」とあり、「なげきど」は落ちるもの、落ちていくものと理解している事が分かる。これは多分恵慶が伊勢歌に触れた時、この見た事もない言葉をそう分析した結果と言ってよい。となれば、やはり単に「嘆き所」だけでは解釈が十分になされたとは言い難い。そこでもう少しこの「と（ど）」に執着してみたい。辞書類で「と」で立項されるものの中には「戸・門」[12]もあり、それと解釈する事は不可能だろうか。例えば『角川古語大辞典』では、

両側に岸や山が迫って、狭くなった所。海や河口などの、水の出入り口。瀬戸。海峡。

また、谷あいなどの同じような地形をもいう。舟や人などの通路となる。

と解説が付されている。つまり、こうは考えられないか。悲しみや苦しみが深く、まるで、それに囲まれ、どうにも身動きがとれない、そういう状態にはまり陥る事を「なげきどにおつ」と表現したのではないかと。よって恵慶の歌は「夏山に立っているだろうか、あの牡鹿の短い角ではないので束の間の嘆きで済むはずはなく、私は、私自身の底知れない深くて暗い嘆きの中に落ちない事があろうか、いや、落ちてしまう」とでもなるのだろう。この事を踏まえて、伊勢の歌を見てみたい。以下試みに解釈を施してみる事にする。男の歌は「一年の半分が過ぎようとするのに、私は私自身の底知れない深い嘆きにとらわれてしまっているので、どれほどの禊ぎをしたとしてもこの嘆きは決して消え失せる事はあるまい」となり、それに対して女の返歌は「身に纏う嘆きを全て祓い清めるあの大ぬさは、あなたのあれほどの嘆きも祓って、もう既に川の流れにのって流れ出てしまっているようじゃないですか」と、もう他の女に現を抜かしているのではありませんかと応酬する。今一つ釈然としない感はぬぐえないのだが、その中にあって恵慶は、この伊勢の歌を自分なりに咀嚼し、特異な表現を修得するに至ったのだ。こうできるのも、やはり、伊勢歌を表面的にだけではなく、その内実にまで迫り捉え得る環境にあったからではないのだろうか。

このように新奇な言葉は勿論の事、新たな言葉を歌に詠み

込もうとするその精神までもが、まるで恵慶にも受け継がれていっているかのようだ。事実、歌中には、恵慶しか用いることのなかった言葉や、恵慶歌に初出例を見出せる言葉が散見する。本稿ではそれを逐一検討する事が目的ではないので、後考を期したい。

四、恵慶の読んだ『伊勢集』

さて、もう一首、同様に伊勢と恵慶に共通する表現を見ておくこととする。それは「心のわりなさ」という表現である。これは、早くは『古今集』に、

（題しらず）　ふかやぶ

心をぞわりなき物と思ひぬる見るものからやこひしかるべき　（恋四・六八五）

とあるように「心をぞわりなき物」という表現が見受けられるのだが、「心のわりなさ」とワンフレーズにしたものは『後撰集』に入集する伊勢の、

つらかりける人のもとにつかはしける　（伊勢）

こひてへむと思ふ心のわりなさはしにてもしれよわすれがたみに　（恋四・八二〇）

が初出例になる。そして、このフレーズを引き継ぐ歌として、『恵慶法師集』の、

人の家に、さくらさきたり

桜花人の心のわりなさはあくともいはじちとせ見るとも　（二九）

があり、また類似表現として、

月おもしろき夜、もみぢを見て、人人ゐたり

もみぢばををしむ心のわりなきにいかにせよとぞ秋のよの月　（三一）

という歌もある。やはり恵慶の好尚の一端がここにも窺える。両歌は「ある所に、屏風のゐに」として、まとめられる屏風歌の歌群に存する。

「わりなし」という言葉は特別難解なものでもないので、解釈も素直に出来るだろう。伊勢の歌は、つれない相手でありながら、それでも、相手に恋する気持ちを拭い去れずに持ち続けるというその心の不合理さ、道理のなさをいう。恵慶の歌は、本来ならば千歳も見続けたならば見飽きて当然なのに、それでも、桜の花を愛でるその人の心の不合理さ、愛さずにはいられないどうしようもない人心を詠んだものだろう。「心」と「わりなし」が同時に歌の中に詠み込まれる例は、これ以後も見受けられるのだが、このフレーズとしては例を見ない。恵慶はどうして「桜花」の歌にこのフレーズを摂取したのだろうか。

さてここで問題となるのは、この伊勢の歌が、『伊勢集』においては歌仙家集本（定家本）系統にしか存在せず、『後撰集』と同様、贈答歌の形で入集しているということだ。いったい、

恵慶はこの伊勢歌を何処で、何に拠って目にしたのだろうか。勿論『後撰集』からの可能性はなくもないが「桜花」の歌にこのフレーズを摂取したという事を考え合わせると、どうもそうではないらしい。そこで『伊勢集』におけるこの歌の位置を再度確認しておこう。

本文（伊勢Ⅲ）	伊勢Ⅲ	伊勢Ⅱ	伊勢Ⅰ
かへし			
①常よりやそふる心のかへりけんしらぬこゑなる声のきこゆる	三五六	三五五	三五三
中つかさのみやのいへの池に、舟をつくりておろしはしめてあそひけるに、ほうわうの御らんしにおはしまして、よさりつかたかへらせ給なんとしける折によみてたてまりつける			
②水のうへにうかへる舟の君ならはこゝそとまりといはまし物を	三五七	四七五	—
③年ふれと忘られはてぬ人の世は心とめてそ猶きかれける	三五八	三五六	四六三
花につけて			
④花の色のこきをみすとてきたるみのをろかに人は思ふらんやは	三五九	三五八	四六五
わらひを人のもとへやるとて			
⑤我ためになけきこるともしらなくに何にわらひをたきてつけまし	三六〇	三五九	四六六
四月にさける桜の花につけて、ゐんの殿上人のもとへおはします御ともにえまいらで、とまれる人のもとに			
⑥とまりゐて春恋しとや思ふらん花もかくこそをくれたりけれ	三六一	三六〇	四六七
⑦こひといはむと思心のわりなさはしにてもしれよわすれかたみに	三六二	—	—
かへし			
⑧もしもやとあひみむことをたのますはかくいふ程にまつそけなまし	三六三	四九二	—
人			
⑨にこり江のすまむ事こそかたからめいかにほのかにかけをたにみん	三六四	三六一	三五四

歌仙家集本系統では①から⑨まで順次配列されているのに対して、西本願寺本系統では①の次に⑨が置かれている。その間の②から⑧は所収されていない歌もあるが、巻末に一括増補された形をとっていることがわかる。このことは既に関根慶子氏の詳細な諸本の調査によって、もともとは、本来の『伊勢集』の祖本に当たるとされる「a」の部分[13]（西本願寺本＝一～三七八、群書類従本＝一～三八一、歌仙家集本＝一～三七七）にあったものを、西本願寺本系統が転写の際になんらかの原因で脱落し巻末に補ったとされる箇所である。恵慶はおそらくこの歌を歌仙家集本系統の配列をもった家集のようなものから見知ったのであろうと推定出来るのだ。というのも⑦の

「心のわりなさ」歌の前歌をみてみると、伊勢が桜の花に歌をつけて、宇多上皇の供として参上出来なかった殿上人に送った歌がある。宇多上皇は、源融から河原院を伝領されており、恵慶にしてみれば、自分が出入りをする河原院に関わる人物の話題が『伊勢集』に存したことから、まずそこに興味が惹かれたはずだ。そして華やいだ在りし日々の河原院をそこから想像していたのではないかと考えられる。よって続く「こひといはむ」という歌は、そういう意味でも記憶に残っており、また、「心のわりなさ」という表現への関心も手伝って、桜の描かれた屏風に歌を付す時、『伊勢集』のこの部分が想起され、「桜花人の心のわりなさは」と歌い出したと考えたい。

さて、そう考えて来ると恵慶が手にしてよんだ家集とはどういうものであったのか。

天暦御時伊勢が家の集めしたりければ、まゐらすとて　中務

しぐれつつふりにしやどの事の葉はかきあつむれどとまらざりけり　（雑秋・一一四一）

御返し　天暦御製

昔より名たかきやどの事のははこの本にこそおちつもるてへ　（雑秋・一一四二）

という歌が『拾遺集』にあることから、『後撰集』が成立する天暦期には、娘の中務の手によって一度伊勢歌が集積されていた事がわかる。そして、詳細は次節で述べるが、恵慶と中務の交流関係から見て、恵慶がその家集を入手し読んだ可能性は極めて高いといえよう。そして、その家集の配列の一部は（少なくとも、今検証した部分においては）現存『伊勢集』の配列に溶け込んでいると考えてよい。

六、恵慶と伊勢の歌を繋ぐ線

ここまでの考察で、恵慶の脳裏には、詳細に分析、解釈された伊勢歌が蓄積されている事が分かる。そして恵慶が手にして読んだ『伊勢集』は、前節で歌仙家集本系統の配列を持った、恐らくは中務が『後撰集』撰集資料として村上天皇に奉った家集であったろう事を述べた。しかし、それ以外にも恵慶は伊勢歌を鋭意収集したであろうし、また、家集に記される歌の成立事情だけではなく、その歌にまつわる話（エピソード）を聞いていたでもあろう。それ故に、他の歌人等よりも一層伊勢に傾倒していったと思われる。そして歌の解釈は表面的なものにとどまることなく、その内実にまでも迫らんとする事が可能だったのではなかろうか。

では、恵慶はどのようなルートから、伊勢の歌を入手したのだろう。例えば、恵慶は紀時文に、父貫之自撰の家集を貸して欲しいと懇願したようで、それを返却する際には、元輔や能宣、安法等が恐らくは河原院に集い、歌を詠みあった事

が、『恵慶法師集』や『安法法師集』に、左記に示した様に見ることができる。

こつらゆきがかきあつめたるうたを、一巻かりて、返すとて

ひとまきにちぢのこがねをこめたれば人こそなけれこゑはのこれり　（恵慶・一五八）

くらのすけ時ぶがかへし

いにしへのちぢのこがねはかぎりあるをあふばかりなき君がたまづさ　（恵慶・一五九）

すはうのかみもとすけがかへし

かへしけむむかしの人のたまづさをききてぞそそくおいのなみだは　（恵慶・一六〇）

よしのぶの朝臣

みづぐきのあとにのこれるたまづさにいとどもさむき秋のそらかな　（恵慶・一六一）

貫之よみあつめたる歌のしふども、恵慶かりてかへすとて歌よめるに、皆人人よみし

紀のいへのくさにのこれる言の葉はかきこそたむれちりのうへまで　（安法・二三三）

これ本あることなり

この時期を熊本氏は時文や元輔の官職から、天延二年（九七三）から寛和元年（九八六）の間だとする。このように河原院において、先代の歌人の家集や歌を披見する事はよくあったのだろう。となれば、当然伊勢の歌もそのような場で何度となく披露された様子が想像されて来る。しかし、恵慶は他の歌人等以上に伊勢歌に接触している事は前述した様に明白であり、恵慶が殊更に伊勢歌とのつながりがある事を考えねばならないだろう。そこで、恵慶と繋がりのある人物、安法法師と中務に着目してみたい。

かつて後藤利雄氏[14]が、『伊勢集』冒頭の歌物語的部分の作者として安法法師説を提示された事があった。その根拠は『安法法師集』所収の、

伊勢といふ人、歌どもの題かきあつめてやれるに[13]

ひさぎおふるかはらのやどの遠近にみゆるもののきみにはせん　（五一）

という歌にある。詞書の「歌どもの題」が『伊勢集』冒頭部分の詞書、つまり物語的部分の事を指し、それを安法が「書き集め」たと解釈された。また歌の下句「みゆるもののきみにはせん」の「みゆる」「はせん」の箇所が、冒頭部分に存在する平中との「見つ」問答を想起させるのだという。この二点を根拠として安法法師を作者だと主張する。しかし、これには関根慶子氏に逐一の反論[16]がある。また妹尾好信氏[17]は中務が天皇の命により伊勢の詠作を収集整理していたが、伊勢縁の人々にも資料の提出を求め、又、河原院関係の詠草は詠作事情が不明なため、安法に「歌どものだい」、つまり詠まれた状況、場所を説明する短い文章を書き記し送って

貰うように依頼したのではないかとする。しかし、現存する資料には、氏も指摘する様に、中務と安法を直接繋ぐ線は何もない。とすれば、「伊勢といふ人、歌どもの題かきあつめてやれる」という安法の行動は、伊勢の歌に傾倒する、親交深き恵慶に依頼されて、恐らくはあまり表に出ることのなかった河原院に残る伊勢の詠草等を拾集し、送ってやったとは考えられないのだろうか。ただ新大系本『平安私家集』所収の『安法法師集』の脚注[18]では、歌人伊勢ではなく、河原院歌会のメンバーで、歌題選定役の者だと解している。確かに歌の内容からすればしっくり来るものがない訳でもないが、それだけのためにわざわざ「伊勢」という名を詞書に記す必然性を感じられない。前述した様に河原院では前代の歌人の家集を見合う様な事実がある以上、やはり、そこに集う者にしてみれば「伊勢」といえば、女流歌人伊勢を誰もが思い浮かべるはずである。

このように、安法から伊勢の歌を入手するルートが考えられるわけだが、やはり、伊勢の歌を多く所蔵しているのはなんといっても娘の中務であろう。そこで今度は、恵慶と中務の関係を考えておきたい。恵慶は娘の中務とも懇意にしていたらしく、次の様な資料が残っている。八十の齢に近い中務が、「子にまかりおくれて侍りけるころ、東山にこも」った折[19]の十二首の連作が御所本『中務集』（中務Ⅱ）に収められているのであるが、『恵慶法師集』には中務の傷心に和する形で十首からなる一連の歌がある。詳細は熊本氏の論考[20]を参照して貰いたいが、晩年になって、突如として、中務と交流があったとは考えにくく、稲賀敬二氏[21]も「彼は、中務が『春の心の歌』として彼に示した一連の歌が、実は傷心に絶えている中務の思いに貫かれていることを、よく察知していた」と瞠目すべき見解を示され、単なる社交辞令的なつきあいではないことを窺わせる。つまり、母・伊勢の歌を介して、互いの感懐を語り合った経歴があったのではないかという事を想起させるのである。となれば、恵慶は中務から直接、伊勢の家集、それは上述した如き経緯によって編纂された中務撰によるものだろう、それを貸して貰った事があったのではないか。そして、中務が語る母の思い出を、家集を読む際に重ね合わせ、その歌の解釈は、他のどの歌人よりも深く、伊勢の内実まで迫るものであったと考えられる。そうして、誰よりも身近に伊勢の歌に触れる事の出来た恵慶は、伊勢の歌の言葉を自分なりに修得をし、詠作活動に反映していったのだと理解できる。

七、おわりに

以上、恵慶歌における伊勢歌摂取の実態を考察してきた。それは同時に恵慶歌における表現の特質の一端を述べる事にもなった。恵慶歌は、とりわけ新奇な言葉を歌語として積極

的に採用するという点において、伊勢歌と同様の特徴が認められる。その事実は、恵慶歌が、伊勢歌の（伊勢の歌作姿勢と言ってもいいが）深甚な影響下に結実したからだと言えるのではないか。

このことは当時における伊勢の評価、つまり新奇な言葉を多く歌に摂取し、独自の表現開拓を試みた歌人であったと認識されていた一つの証左にもなり得るであろう。そしてその事を踏まえた上で、「古今的歌風の代表歌人・伊勢」と言う枠組みに捕らわれる事なく、多角的に伊勢歌を分析する事が望まれる。

また従来から問題とされる『伊勢集』の祖本の形態に関しても、伊勢歌を直接享受した人物を照射することで、朧げながらもその輪郭が浮かび上がって来たのではないかと感じている。これは更なる検討を加え究明されるべき課題であり、追って考察を試みたい。

注

（1）小町谷照彦氏は「古今集の歌風と展開」（『和歌文学講座4古今集』所収、勉誠社＝平5・12、＊一一七頁。）の中で、「『古今集』の歌風の特徴としては、精密な修辞、理知的な趣向、類型的な歌語、典雅な感覚や美意識などが挙げられよう」と述べている。

（2）熊本守雄『恵慶集校本と研究』（桜楓社＝昭53・3）。本文は『新編国歌大観』所収の流布本を用いたが、必要に応じて、古本系統を代表するという書陵部蔵本（一五〇・五五八）の異同を「校本編」より傍記した。

（3）近藤みゆき「河原院文化圏に関する一考察―曽称好忠・恵慶・源道済の漢詩文受容を中心に―」（『千葉大学教養部研究報告書』A―22＝平2・3）

（4）貴重本刊行会より私家集注釈叢書の一つとして、川村晃生・金子英世・松本真奈美氏等による『恵慶集注釈』が予定されている。

（5）「さ夜中に友呼びわたる雁がねにうたて吹き添ふ荻のうは風」（『源氏物語』・少女）とあるように「うはかぜ」は歌中において「荻」とともに用いられる事が多い。また、恵慶歌は風の激しさを詠むことからも、ここは「むらかぜ」ととるのが妥当であろう。また「むれ」は「むらぐも」「むらくさ」のように複合語の前項にくると「むら」となることから、ここは「むら松」ととって問題はない。

（6）片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』（角川書店＝昭58・12→増訂版、笠間書院＝平11・5）、「ひら【比良】」の項。

（7）関根慶子・山下道代『私家集全釈叢書16伊勢集全釈』（風間書房＝平8・2）。

（8）「なげきをば」というフレーズは既に『古今集』の六〇六番歌（貫之）や一〇五七番歌（詠人不知）にある。

（9）注7。

（10）注7の『全釈』。平野由紀子校注「伊勢集」（『新日本古典文学大系28平安私家集』所収、岩波書店＝平6・12）。高野晴代校注「伊勢集」（『和歌文学大系12小町集／業平集／遍昭集／素性集／伊勢集／猿丸集』所収、明治書院＝平10・10）。

（11）『日本国語大辞典』の「と（所・処）」の項目には、「（語素）他の語について、ところ、場所の意を表す。連濁で〈ど〉ともなる。

〈せと（瀬戸）〉〈くまと（隈戸）〉〈こもりど（隠所）〉〈たちど（立所）〉と説明がある。その語源は「止（ト）」の義からだと言い、『日本書紀私記（甲本）』（『新訂増補国史大系8』所収、＊三頁。）の「古語謂居住為止」を挙げている。

(12)『類聚名義抄』（法下・七四）には「門カト」「水門ミツト」と示されている。『岩波古語辞典補訂版』では「と（戸・門）」の項目において〈ノミト（喉）・セト（瀬戸）・ミナト（港）のトに同じ。両側から迫っている狭い通路。また、入り口を狭くし、ふさいで内と外を隔てるもの〉とその語源を説明している。

(13) 関根慶子『中古私家集の研究』（風間書房＝昭42）の第二章第一節「三系統本異同の実態」。「a」とは三本の最も基本的な共通部分を指す。

(14) 後藤利雄「伊勢集巻頭の歌物語の作者について―伊勢物語の書名に関聯して―」（『文学・語学』14＝昭34・12）。

(15) 後藤氏が引用した詞書きは「いせといふ人の歌どもの題かき集めてやれるに」とある。

(16) 関根慶子「伊勢集巻頭の安法法師作者説に対する疑問」（『文学・語学』16＝昭35・6→『中古私家集の研究』、風間書房＝昭42に所収）。

(17) 妹尾好信「『伊勢集』成立年時試考―巻頭の歌物語と『平中物語』との関係を中心に―」（『國文學攷』一一一号＝昭61・9）。

(18) 犬養廉・後藤祥子・平野由紀子校注「安法法師集」（『新日本古典文学大系28平安私家集』所収、岩波書店＝平6・12）

(19)『拾遺集』春・三六番歌に、

　　子にまかりおくれて侍りけるころ、東山にこもりて　　中務

　　さけばちるさかねばこひし山桜思ひたえせぬ花のうへかな

がある。

(20) 注2。＊一五二～一五八頁。

(21) 稲賀敬二『日本の作歌6中務』（新典社＝平11・4）＊一九九頁。

※和歌の引用は特に注を施さない限り『新編国歌大観』に拠る。但し、私家集において『私家集大成』に拠る場合はその略語で、『新編国歌大観』に拠る場合は「―集」で示す。

（かとう・ゆういち　本学大学院博士後期課程）